

誰のおかげで今日があるのか？

koberyo1

飛行予科練習生、いわゆる海軍の予科練に十七歳になって入ったことは、これまでに何度か書いてきた。そして、予科練で人生で役に立つ多くのことを吸収してきたのだった。

予科練ではさまざまな心の指針を発見してきた。そのような人生訓をあれもこれも、と心に浮かび上がり、まとまりはつかないけれども、思い出すがままに自由に書いてゆきたいと思う。

いまの時代こそ「しつけ」の大切さが世界的にも証明されつつある時代なのではないか、と思う。「驍のある人」が光って見える時代が到来したのである。

というのも、人の心、そして品格などは普遍的なものであり、日本を訪れる外国人がわたしたちの洗練された道徳心を非常な驚きをもって称揚することからも、「しつけ」が実はグローバルなものであること、全地球的に大切にされてきたことを思い知らされるのである。

さて、予科練と「しつけ」についての話題に戻ることにしよう。

テーマは「人は親の御蔭を蒙って、この世に生を受け、今日の自分がある」ということについてまず、書いてみることにしたい。

予科練の通信学校がある久里浜の冬は寒かった。

ある凍てつくような日曜日のことだった。外出許可が出たので朝食後、隊列をくんで門を出たときのことだった。なんと門のコンクリートの塀のそばに父母が寄り添うようにして佇み、眼を皿のようにしてわたしを探している姿がみえたのだ。

「アアッ」と心の中で叫んだ。

まだわたしがそばにいることを捉えていないようすの父と母。隊列は桜の名所である衣笠山公園までで、そこで解散。公園のなかには酒保があり、そこで食事ができるようになっている。

隊列は公園で解散した。一月の寒い日だったが、やっと父母はわたしをみつけ、駆け寄ってきてくれた。

「ああ」。涙がでてきて、言葉がでてこない。

父はわたしの姿をみて、「元気そうで何より」と言った。母はハンカチで目頭を押さえながら、何やら重いものを持っていて、「“おはぎ”と“おいなりさん”を作って持ってきたよ」と言った。わたしはこの時のこと、父母の愛の力を強く感じて今でも心の底に残っている。

「親の意見となすびの花は、千に一つも無駄はない」

まさにその通りだと実感する。若いうちから親の恩を理解し、感謝できる人は他の人にも感謝の心で接することができ、逆に他人から信頼されるようになる。それは立派な財産なのである。

海軍の恒例の行事に一万メートル競争という競技が冬に行なわれる。

これは日本全国の海軍基地のある場所で実施されるものだ。

分隊単位の団体競技であるから、一応は分隊一つがまとまって駆けるのが基本である。分隊の全員が一つにまとまってゴールに入らなければ、そのチームは「負け」ということになる。軍隊はすべて連帯責任である。そのチームに脱落しそうな者があれば、みんなで引っ張ったり尻を押ししたりして連れてゆくわけだ。落伍しそうな者も負けじとみんなで一緒にひいひい言いながら走った。

道のりはもちろん、民間の道路を利用する。

コースは衣笠山公園を利用する。

衣笠山公園とは、日露戦争の戦勝記念として開園した公園だ。開演当時に植樹した桜も二千本もあった。市内随一の桜の名所として人気があった。ここは横須賀通信学校からは眼と鼻の先というか、すぐのところにあった。

衣笠山公園では班の態勢をととのえたり、点呼をとったりした。そうしてそこからさらに先の海沿いの道にすすむことになる。三浦半島の先端、野比海岸にむかって走る。これから誠にわたしたち練習生がショックを受けた場所が二箇所あった。

一つは特攻隊の訓練地、「伏龍基地」が野比海岸にあるのだった。そしてさらにもう一つの場所がわたしたちに強烈な衝撃を与えた。

それは松林の高台の一角、太平洋の大海原が見渡せるところで海軍の病院があった。前線で負傷した人たちを収容しているところだ。そうした傷病兵の方々が、わたしたち若者の一万メートルもの体列を眺めていた。

松葉杖で体を支えている人、頭を包帯でぐるぐる巻いている人、腕を吊っている人も

あれば、車椅子に乗っている人もいた。それぞれが白いガウンを着ているのだった。

わたしたちといえはこんにち練習生として、ぬくぬくと訓練を受け、走っているばかりである。それに対し、作戦に従事し、拳銃に負傷したり病気に罹ったりするひとたちもあり、何とよく考えてみれば、あたかも人生の縮図をみているようで心苦しかった。

この日、一万メートルの団体競技は無事終了し、行事は終わった。

この頃、卒業と同時に実践部隊行き話題が多くなってきて、「自分はどこで働くのか」と思い、もしたとえどこに行ったとしても真心だけは忘れまい、と誓うのだった。